



## 調布市児童館における子どもの遊びと人間関係

A study of the children's activity and interpersonal relationship at the children's hall attached to After School Day Care Center in metropolitan area of Japan

大場 泰希

Taiki OHBA

### 【要旨】

子どもをとりまく環境はさまざまな社会的背景により日々変化しており、子どもの遊び環境を見直す必要性が指摘されている。本研究では、子どもをとりまく環境の本質的な問題は、子ども集団の喪失や友達との人間関係の希薄さにあると考え、調布市の児童館において児童の遊びや人間関係に関する参与観察をおこなった。この児童館には、学童保育施設が併設されており、同一施設の中で異なった利用の区分と形態の児童が放課後を過ごしている。学童保育施設併設型児童館において、児童はどのような人間関係のなかで生活しているのかを、児童館内における子ども行動に関するデータを取得し、子どもどうしの関わり度合いを分析した。その結果、児童館での遊び集団は男女が分離している傾向があった。男子の47.7%が異年齢の児童からなる遊び集団の中で遊んでおり、女子は77.1%が同年齢の児童からなる遊び集団の中で遊んでいた。また、男子はある特定の集団的遊戯活動を目的にして、それに興味や関心を持つ子どもが寄り集まって形成される活動集団を、女子は集団的遊戯活動よりも成員である仲間との相互的活動や交渉を目的として形成される交友集団を形成しやすいことがわかった。また、児童館は地域の遊びの拠点として、地域児童が多数利用しており、事例を通してその生活実態や、地域における児童館の機能については、学童保育施設と児童館が併設されることにより、学童保育施設内の社会関係の強化や、児童館を利用する児童に対する遊び相手資源をストックしているという学童保育施設併設型児童館の機能が明らかになった。

キーワード：学童併設型児童館、放課後、遊び集団、異年齢集団

### 1.はじめに

近年、子どもをとりまく環境は日々変化を続けており、子どもの遊び環境を見直す必要性が指摘されている。その背景には様々な要因が考えられる。子どもを対象とした研究でよく言及される問題として、三間の減少が挙げられる(仙田 1993)。三間とは、遊び仲間、遊び時間、そして遊び空間のことである。三間が減少している要因としては、少子化により遊び仲間をつくりにくくなったことや、放課後に習い事や学習塾へ通い、遊び以外に費やす時間が増加したこと、空き地など子ども

が自由に利用できる場所が少なくなったことが挙げられている。その他にも、児童を狙った犯罪の増加により、子供の外遊びの安全性に対する保護者の不安の高まりも子どもの遊びを規制する一因となっている(梶木ほか 2001)。また、核家族化の進行や、一人親の世帯と共働き世帯の増加により、学校から帰宅しても両親が不在の家庭が増えているといった家庭の問題もある(下浦 2007)。今日の子どもの遊びを考える際に、偏差値や受験戦争といった子ども間における序列化をめぐる問題が取り沙汰されることも多い。しかし本質的に問題であるのは、子ども集団の喪失や友達

との人間関係の希薄さにあるのではないだろうか。

このような視点で見えていくと、子ども社会において日常的な異年齢集団が姿を消している可能性がある。本稿では、児童館や学童という、小学校とは異なった空間での生活や遊びにおいて、異年齢集団というものが今もなお存在しているのか、学校とは違った環境のなかでどのように生活をおくっているのかといったことを考えてみたい。

子どもをとりまく外部環境や遊びについて調査した研究は、大きく三つに分類出来る。まず最初に遊びそのものの機能や意味について調査するものがあげられる。亀井(2009)では参与観察により遊びを観察し、遊びの文化伝達機能について考察をしている。次に外部環境の変化により如何に遊びが発生するかを調査するものがあげられる。水月(2007)は子どもにとって通学路という時空間を遊び場として位置づけ、参与観察によって、道草遊びの発生要因を通学路の環境から考察している。また、寺本・大西(2004)はメンタルマップやアンケート調査をおこない、子どもの遊び空間や、その変遷を考察している。最後に子どもたちを取り巻く社会や集団形成を調査したものがあげられる。住田(1995)の子どもの仲間集団に関する研究では、参与観察や面接、児童の遊び中の会話の録音をおこない、会話の内容をベールズの相互作用分析という手法で分類し、ソシオグラムを作成することで、集団形成の過程や、集団の構造、変容や人間関係について考察している。またヴァレンタイン(2009)はアンケート調査や、保護者たちとの議論というかたちで聞き取り調査を行い、親が持つ子どもの外遊びへの不安感を明らかにしたうえで、公共空間への子どもの参画の必要性を説いている。

以上のように子どもと遊びと言っても、その研究対象は遊びそのものへの現象学的研究から、遊びの発生、子どもたちの集団形成や地域社会での位置づけに及ぶまで非常に多岐にわたる。寺本(2004)は子どもについて研究する際の注意点として、子どもは大人と異なり、空間の認識や行動パターンに特徴がある

ため、発達心理学の立場からとらえられるような成長の過程として子どもを位置づけると同時に、社会学の立場からとらえられる集団や組織、社会性といった側面からも位置づける必要があると述べている。

児童館を調査地とした研究は建築計画学で多く行われている。しかし、施設の利用状況についての研究が主で、子どもの遊びや生活をふまえて、集団の構成について調査したものは少ない。

本論文では、(1)放課後の子どもたちの居場所と遊び場を確保し、時として学童保育の場を通して集団行動を強いることのある学童併設型の児童館がどのように機能しているのか。(2)児童館の中で子どもたちがどのように遊ぶのか。(3)児童館での遊びや生活が、子供たちの集団の中での社会性や人間関係の形成についてどのような影響を与えるのかを検討していく。これら3項目に着目して、児童館の内部における子どもの生活実態を調査することは、今後の子どもをとりまく環境を考えるうえで社会的な意義のあるものだと考えている。

## 2.調査地概要

### 2-1.学童保育とは

まず学童保育について説明しておこう(図1)。戦後、共働き世帯が増えていくなかで、共働き世帯や母子・父子家庭の世帯の子どもたちは、小学校の授業がない冬季と春季、夏季の休業中や、放課後には子どもたちだけで過ごすことになった。1948年大阪市の今川学園で学童保育が開始され、その後増加の一途をたどり、現在の学童保育施設数は18,475ヶ所にのぼる(図2)。対象児童は主に小学校1年生から3年生であるが、それ以上の学年の児童を対象としているところもある。運営主体は市町村の自治体が主で、その他に、社会福祉協議会や社会福祉法人、民間団体や民間委託など、地域の状況に応じてさまざまな運営形態がある。そのため設置場所は児童館内

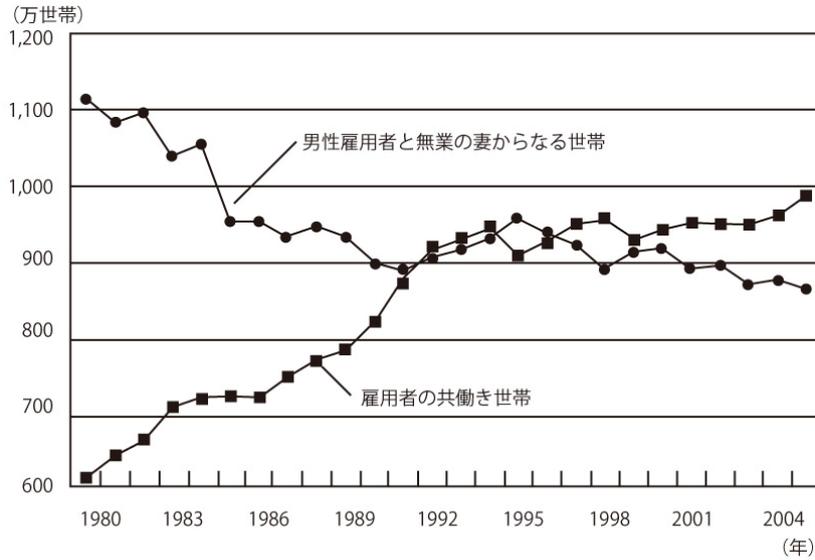


図1 全国の共働き世帯数推移  
(総務省労働力調査特別調査・労働力調査より作成)

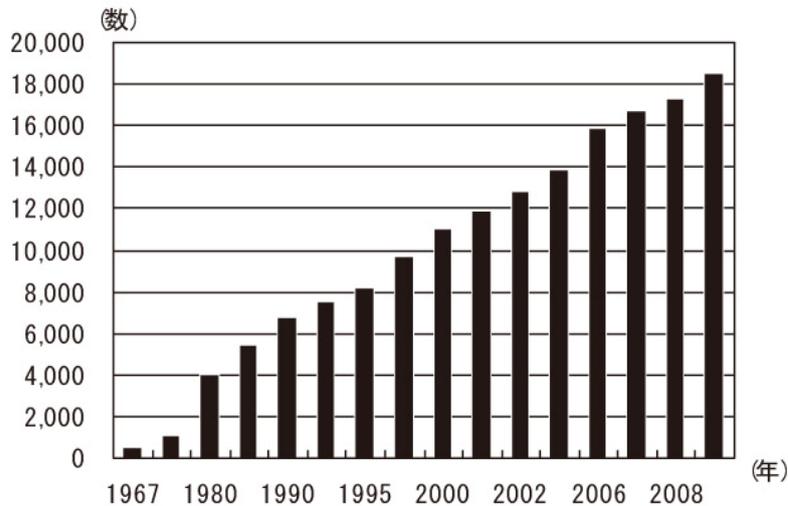


図2 全国学童保育施設数の推移  
(「学童保育情報 2009-2010」より作成)

や学校施設内、学童保育専用施設、その他の公的施設や法人などの施設、民家・アパートなど多岐にわたる。また、名称も学童保育所、子どもクラブ、留守家庭児童室など様々である。このように地域によって運営形態が様々である背景には、国やほとんどの自治体において、学童保育の設置や運営の基準が定められていないことがあげられる。

全国学童保育連絡協議会が実施した 2007 年度の調査によると、小学校 1 年生から 3 年生までの児童の学校滞在時間と児童の学童滞在時間の平均はそれぞれ、年間約 1,140 時間と年間約 1,650 時間であった。以上から学童保育で過ごす時間は、小学校で過ごす時間よりも長いことがわかる。そのため、早急に運

営基準を設け、生活の場としての環境を整えることが必要だとされている(下浦 2002)。

## 2-2.調布市立児童館について

本研究では、東京都調布市に位置するX児童館を調査の対象とした。1985年から2005年までの国勢調査によると、調布市における18歳未満の親族のいる総世帯数と核家族世帯数は、1985年から2000年まではともに減少する傾向を示したが、2005年にはともに増加に転じている(図3)。しかし18歳未満の親族のいる総世帯数における核家族世帯数の割合は調査ごとに増加し、子どもを持つ世帯数も増えていた。また、18歳未満の親族のいる総世帯数における母子・父子家庭世帯数の割合は調査ごとに増加していることがわかる(図4)。

調布市は児童館を、子どもたちがさまざまな経験をしながらたくさんの友達を作り、成長していくことを支援するための場所として位置づけている。保護者を伴った乳幼児から、高校生までの幅広い年齢層に広く開放され、児童館は地域の遊び・交流の拠点となっている。また子育て事業や、地域住民のサークル

活動などにも利用される。

調布市では学童保育施設を学童クラブと呼び、調布市内の児童館に併設されている。学童クラブの受け入れ学年は、小学1年生から小学3年生である。本論文で分析対象としている子どもの集団は小学校1年生から3年生までが中心だという特徴がある。現在調布市における児童館の数は11館である。学童クラブは公設公営で21箇所、公設民営4箇所の計25箇所に設置されている(図5)。

現在、X児童館には8人の職員が勤務しており、その構成は館長1名、主査1名、児童館担当2名、学童クラブ担当2名、子育て相談員1名、臨時職員1名である。学童登録児童数は1年生の男子は7人、女子は7人、2年生の男子は6人、女子は4人、3年生の男子は3人、女子は2人の合計29人であった。

先述の通り、X児童館は館内に学童クラブが併設されている。学童クラブが児童館に併設されていることにより、児童館の利用形態は以下の三つに分かれる。一つ目は、学童クラブの育成プログラムに則った利用である。この場合には学童クラブへの登録が必要であり、自由な遊び時間のほかに、おやつ

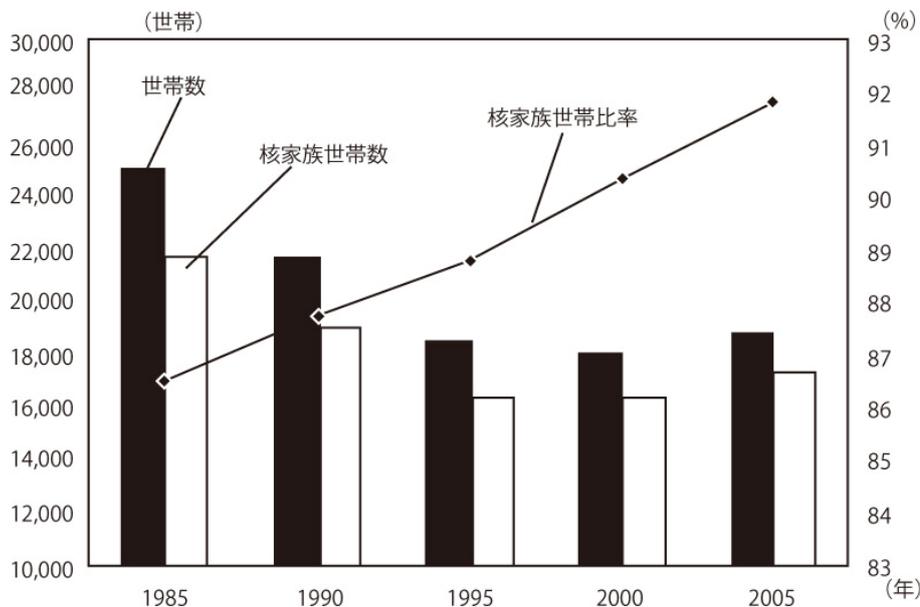


図3 調布市における18歳未満の親族のいる世帯数と核家族世帯の割合(国勢調査より作成)

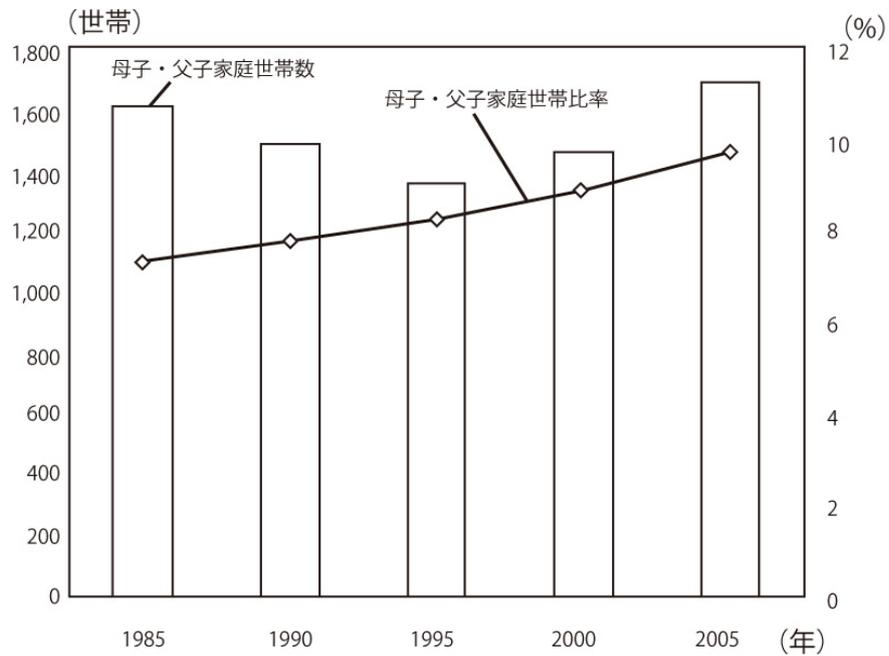


図4 調布市における18歳未満の親族のいる母子・父子家庭世帯数とその割合 (国勢調査2005年より作成)

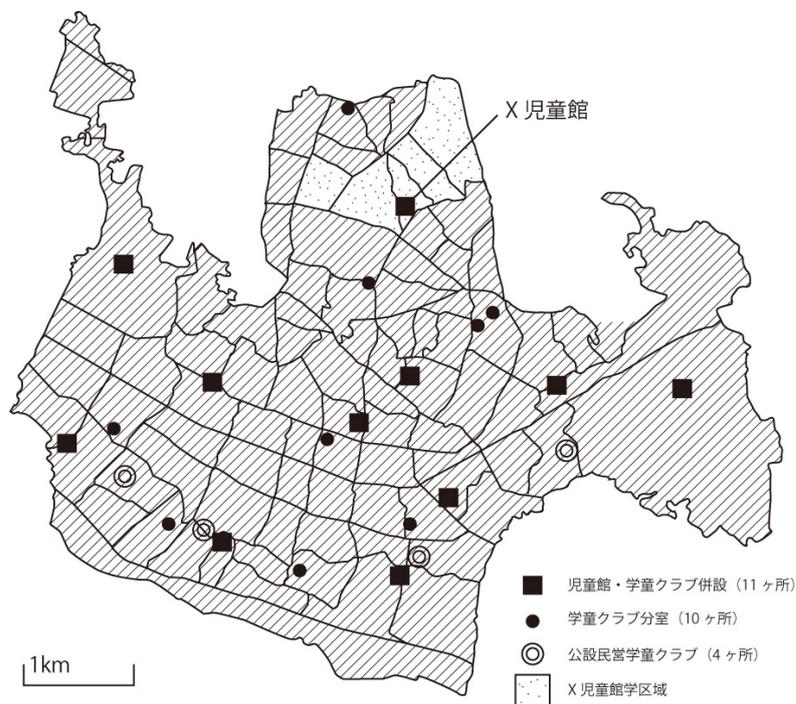


図5 調布市内の児童館・学童クラブ分布図

や帰りの会といった学童クラブの育成プログラムへの参加が義務づけられる。二つ目は、

児童館の遊び場としての利用である。この場合には、職員室で来館者名簿に署名すること

で、学童クラブへの登録の有無にかかわらず誰でも利用することができる。遊び場としての利用形態を学童クラブ登録者は「遊び」と呼び、学童クラブの利用とは明確に区別されていた。「遊び」利用の場合には、学童クラブ登録者であっても、学童クラブの育成プログラムに参加することはできない。三つ目は、児童館の提供するサークル活動などのプログラムへの参加である。学童クラブ室については、学童クラブの育成プログラムに則った利用のみ可能であるが、その他の部屋については児童館の利用者、学童クラブに登録している児童が共用する。また、職員室にてボールや遊具を貸し出しており、専用の名簿に署名し、借りることができる。

子どもたちの一日は、下校後に「ただいま」と帰ってきてから学童クラブ室に連絡帳を提出することで始まる。その後、自由な遊び時間となる。宿題がある児童は、学童クラブ室に設けられた机などを利用して宿題を済ますこともある。16時ごろに学童クラブ育成プログラムの一環としておやつ時間が設けられており、学童クラブに登録している児童がみんなでおやつをとる。おやつ時間に勝手に遊ぶことは禁じられている。その後、おやつを食べ終わり、もう一度自由な遊びの時間となる。帰りの会は16時45分ごろから始まる。17時に帰宅する児童のなかで集団下校をする児童は集団下校のコースごとに、延長保育をする者は延長保育する児童ごとに、帰宅の方向ごとにあつまり整列して帰りの会に参加する。その後、大半の児童は集団下校や保護者のお迎えで帰宅する。

集団下校は、家の方向が近いものどうして分かれた4つのコースがある。延長保育を希望する児童は最長6時まで滞在でき、保護者のお迎えにより帰宅する。子どもを狙った事件が多発するなか、児童の安全に対する配慮として、集団下校のみならず、小学校から児童館への道中についてはなるべくクラスの学童登録児童が連れ立って来館するよう促している。

このように学童クラブでは遊びを中心とした生活をおくって、遊び以外の時間でも子どもたちは常に誰かと関わりをもっている。

### 3.調査方法

本研究では、児童館における遊びの実態と普段の学校生活とは異なった、異年齢集団のなかで構築される人間関係について、学童に在籍する児童と児童館利用者を対象とし、参与観察にもとづいて、その実態調査を試みた。

観察対象は、児童が利用できるX児童館の諸室と外部のグラウンドとし、実測によりベースマップとなる間取り図を作成した(図6)。対象児童は学童クラブに登録している児童と児童館を利用する児童である。児童館内での参与調査は2009年9月14日から11月21日のあいだ、のべ20日間にわたって断続的に実施した。

また、9月29日(火)、9月30日(水)、10月9日(金)、10月16日(金)の平日4日間、のべ20時間にわたり、児童館内における子どもの行動に関するデータを取得した。調査方法は、学童クラブに登録している児童については調査者が敷地内を移動し、子どもの位置や行動、学年、性別を10分ごとに記述した。それ以外の項目については学童クラブの登録している児童と同様に記述した。その際ともに遊んでいる児童をグルーピングし、どのような遊びがいつ、どこで、誰と行われているのかを記録した。また、指導員や父母との会話を通して、子どもの日常生活を観察した。参与観察と会話を通して得られたデータについては事例として取り上げる。

### 4.子どもの遊びとその集団

#### 4-1.人数と集団の大きさ

遊びの時間にみられた遊び集団を、児童のみで構成される集団と大人が介在する集団の二つにわけた。つぎに、男子のみ、女子のみで構成される男女分離型と、男女混合型に分類した。10分ごとの観察結果を1事例として

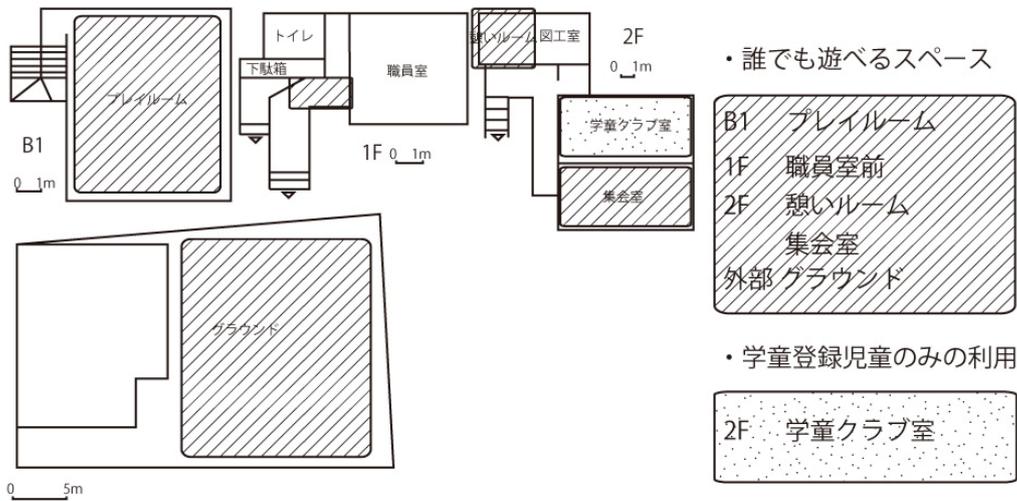


図6 X児童館の間取り

カウントした結果、児童のみで構成される集団は494事例であり、大人が介在する集団は44事例であった。このことから自由な遊び時間では児童のみが遊び集団を形成している事例が圧倒的に多かった。以下、本節では、児童のみで構成される集団に注目し、その集団構成についてみてみよう。大人が介在する集団の事例に関しては、6-2.で述べる。

男女分離型は437事例であった。その内訳は、男子のみの事例が318事例で、女子のみの事例が119事例であった。男女混合型は57事例であった(表1)。児童館内での自由な遊び時間における集団構成は、男女が分離している傾向が強く、全体の88%を占めていた。4日間の自由な遊び時間における集団を構成する人数(集団規模)をグラフで示した(図7)。男子児童のみの場合では、集団規模は最大で11人となった。また、3人程度の集団規模で遊ぶ児童が圧倒的に多いことがわかる。女子児童のみの場合では集団規模4人の人数が一番多く、ついで集団規模5人の人数が多い。集団規模は最大で6人であり、集団規模の幅は男子のみ、男女混合のときに比べて狭いことがわかる。

#### 4-2.自由な遊び時間での異年齢集団

学童クラブの育成プログラムの時間中、児童は3年生を班長とする縦割りの班や、集団下校のコースごとに異年齢集団が形成される。この節では、自由な遊び時間における異年齢集団と同年齢集団がどの程度の割合で存在するかを明らかにするため、児童が1人で過ごす事例を除外して考え、男子児童のみの集団と女子児童のみの集団、男女混合の集団をそれぞれに分けてみていこう。男女分離型、男女混合型の異年齢集団、同年齢集団の構成人数を示す(表2)。まず男子児童のみの集団では、異年齢集団が47.7%で、同年齢集団が52.3%であった。女子児童のみの集団では、異年齢集団が22.9%で、同年齢集団が77.1%であった。男女混合集団では、異年齢集団が60.6%で、同年齢集団が39.4%であった。男子児童のみで遊ぶ場合には約半数が異年齢集団で遊び、女子児童のみで遊ぶ場合には同年齢集団が多いことがわかった。

#### 4.3.児童館における子どもの遊び

男子児童はサッカー、ドッジボール、カタ

表1 4日間の自由な遊び時間における集団の事例数

集団中人数	児童のみの集団			大人を介在とする集団*1		
	男子	女子	混合	男子	女子	混合
1人	87	33	0	0	0	0
2人	68	31	17	13	7	0
3人	86	18	16	7	2	3
4人	31	22	12	6	0	3
5人	15	14	7	1	0	1
6人	7	1	2	1	0	0
7人	9	0	3	0	0	0
8人	5	0	0	0	0	0
9人	4	0	0	0	0	0
10人	3	0	0	0	0	0
11人	3	0	0	0	0	0
計	318	119	57	28	9	7
	計 494 (91.8%)			計 44 (7.2%)		

\*1 大人の人数を含む

(2009年10月に実施した調査より作成)

表2 男女分離型・男女混合型別の集団・同年齢集団の構成人数合計

	男女分離		男女混合	合計
	男子のみ	女子のみ		
異年齢集団(人)	399 (47.7%)	64 (22.9%)	120 (60.6%)	583
同年齢集団(人)	438 (52.3%)	216 (77.1%)	78 (39.4%)	732
計	837 (100%)	280 (100%)	198 (100%)	

(2009年10月に実施した調査より作成)

キなどのボールを使った遊びの際に集団規模が大きくなっている(表3)。カタキとは、複数

名でボールを当てあうドッジボールのようなゲームで、ドッジボールとの違いは、ボールをキャッチしてから3歩しか動けないというルールがあることである。ニンテンドーDSで遊ぶ児童は1人から3人程度の小さな集団で遊ぶことが多い。ニンテンドーDSは学校に持ち込めないため、学校から直接学童に通う児童は持ち込めず、学校から帰宅した児童によって児童館に持ち込まれる。

また、女子児童は鉄棒やごっこあそび、絵を描くときには集団が大きくなっている(表4)。集団規模が小さいときはブロックや積み

木、読書といった遊びが観察された。男女混合集団では、ごっこあそびや会話、絵を描く

ときに集団規模が大きくなり、女子児童の遊びに似た傾向がある(表5)。

#### 4.4.児童の人間関係

今回の調査で得られた子どもの行動に関する結果から、自由な遊び時間において児童一人に対して誰がどの程度関わっていたのかを集計した(表6)。児童館内での児童の関わり回数についてみていく。

事例数にばらつきがあるのは、欠席の児童

表3 自由な遊び時間における男子の遊びと遊び集団の構成人数

男子	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人
サッカー	3	9	2	4	4	3	6	2	1	2	3
ドッジボール			1		4	2	1		3	1	
かたき				1	1		1				
会話		2	8	1	4	1					
カードゲーム	1	4	15	9	2						
バスケットボール	2	2	15	1		2					
ボールあて		2	1	1	1						
野球		2		3							
壁あて	7	2	7	1							
ニンテンドーDS	22	17	15	8							
おいかけっこ		7	1								
ボードゲーム	1	3	2	4							
キャッチボール		9	5								
ユニホッケー		1	3								
砂遊び	4	2	2								
フリスビー			3								
ブロック	1	1	1								
手打ち野球			1								
鉄棒		2									
リフティング	3	3									
自転車	1	1									
工作		3									
こま		2									
おにごっこ		1									
絵を描く		3									
一輪車	2										
つみき	1										
けん玉	1										
本読み	8										

(2009年10月に実施した調査より作成)

がいることや、学年があがるごとに小学校の下校時刻が遅くなり、児童館で過ごす時間が短くなるためである。児童館における児童の遊びの事例を示していくが、人名はすべて仮名である。

3年生のしんやの遊びが確認できたのは12回で、そのうち1回(8%)が大人と関わっていた。2回(16.7%)の場面で1年生のたつやととしおと関わり、2年生のせつことは5回(41.7%)の場面で遊んでいた。1年生のきょうことは1回(8.3%)の場面で、りきやとは9回(75.0%)の場面で遊んでいた。特徴としては学童クラブに登録していない、りきやや2年生女子児童のせつこと良く遊んでいたことがわかる。

3年生の男子児童については児童館を利用する児童との関わりが目立ち、学童に登録していない高学年児童と遊んでいた。2年生の

男子児童については、2年生男子どうしが関わる頻度が高く、男子の1年生ともよく遊んでいる。のぶおは2年生の男子児童で唯一、1年生の女子児童と遊んでいる。1年生の男子児童は性別、学年に関係なく関わりをもっている。また、それぞれの児童と、関わる頻度が小さいことから、特定の遊び相手をもたずにあそんでいることがわかる。のりおは学童クラブに登録している児童のなかで、一番大人との関わりが多く、1年生の男子児童のなかで唯一、女子児童と関わっていない。

学童には登録していない児童のたろう、りきや、てる(1年生)とこうき(4年生)の傾向としては1人で遊ぶ割合が高く、1年生男子や3年生男子とよく遊んでいることがわかる。たろうとただおはおたがいに良く遊んでいた。

3年生の女子児童は互いにあまり関わって

表4 自由な遊び時間における女子の遊びと遊び集団の構成人数

女子	1人	2人	3人	4人	5人	6人
鉄棒	2			9	3	1
ごっこあそび					2	
おどる	3				3	
絵を描く	2	2			1	
砂遊び	1	4			3	
おにごっこ				2		
一輪車		4	3	1		
会話		9	6	8		
じゃれあい		2		1		
ままごと	1	5	6			
手遊び			1			
おいかけっこ			1			
おりがみ		2				
ブロック	3	1				
ニンテンドーDS	2					
リフティング	1					
工作	2					
本を読む	5					
つみき	1					
おはじき	1					
その他	1					
キーボード	1					

(2009年10月に実施した調査より作成)

表5 自由な遊び時間での男女混合の遊び

男女混合	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人
ごっこあそび							3
会話		4		2		2	
ブロック		2	1	4	1		
カードゲーム					1		
絵を描く		1			2		
じゃれあい		2		2	1		
おいかけっこ				2	2		
DS			9	2			
カロム		2	1				
一輪車			3				
将棋		3	1				
オルゴール		1					
おりがみ		1					

(2009年10月に実施した調査より作成)

いないが、学年や性別にかかわらず、さまざまな児童と関わっている。えいこは2年生の女子児童である、あやと一緒にいることが多い。まゆは、3年生の男子児童のげんたや、1年生の男子児童のただおと一緒にいることが

多い。  
2年生の女子児童のゆずはと、しのと、あやは3年生女子のえいことよく遊んでいる。しのとあや、せつことあやはお互いよく関わっているが、しのとせつこはあまり関わって

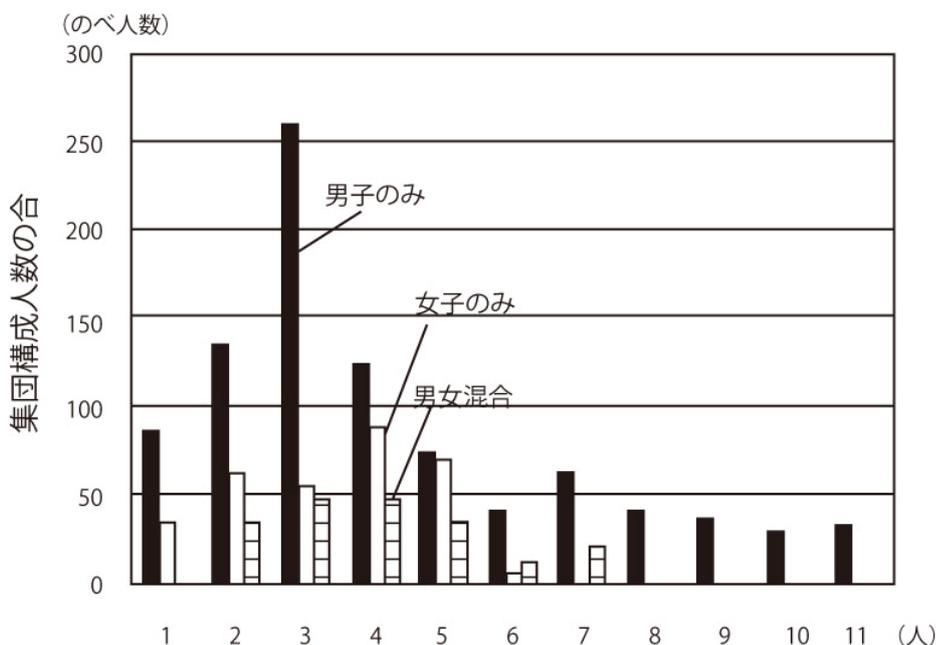


図7 4日間の自由な遊び時間における集団規模

ないため、3人でよく一緒に遊んでいるというよりは、しのとあやや、せつことあやとグループをわけて遊んでいることが考えられる。1年生の女子児童では、きょうこを除く児童どうしは特に関わる頻度が大きかったことから、1年生の女子児童どうしの集団ができていくことがわかる。1人でいる頻度がもっとも高いのは、1年生の女子児童きょうこであった。きょうこは女子児童よりも男子児童との遊びが多く、大人との関わりも女子の中で一番大きかった。また、きょうこ以外の1年生の女子児童は1人で遊ぶことが少ないことから、きょうこ以外の1年生の女子児童どうしのまとまりが強いことがうかがえる。X児童館学童クラブでは、きょうこのみが特例として他の小学校から通っている。小学校での人間関係が、学童クラブにおいても影響している。

土曜日では、遊び利用で来館する児童や、学童に来て半日で帰る児童もいるため、学童クラブ利用人数が2、3人程度になることもある。土曜日であっても、たろうをはじめと

する外部児童はよく来館しており、学童クラブに登録している多くの児童が学童クラブに登録していない児童と一緒にいることがわかった(表7)。

平日とは異なった集団を形成して遊ぶことにより、平日と土曜日では異なった人間関係が生まれていた。

## 5.児童館の利用— 事例にもとづいて

### 5-1.学童育成プログラムが遊びに与える影響

調査を通して、児童たちの間には学童クラブへの登録の有無が意識されており、【事例1】では利用形態の違いで遊びを拒否した例、【事例2】ではサークルやおやつによって遊びが制限される例、【事例3】ではおやつによって遊びが制限される例、【事例4】では学童クラブの登録者と非登録者が遊ぶ例を紹介し、学童育成プログラムが遊びに与える影響を検討していこう。





【事例 1】利用形態の違いで遊びを拒否した例(10月31日(土)14時00分)

1年生のあやこが学童クラブ室で絵本を作っていた。その後、1年生のりょうこが来館し、学童クラブ室をのぞきにきた。あやこもりょうこも学童クラブに登録している児童である。しかし、りょうこは児童館に「遊び」で来たため、学童クラブ室に入ることができない。りょうこは学童クラブ室の入り口で、「一緒に遊ぼう」とあやこに声をかける。あやこは、「ダメ。だって、りょうこは遊びだから、入れないじゃん」と言い、そのまま絵本を作り続けた。

【事例 2】サークルやおやつの時間によって遊びが制限される例(10月26日(月)15時20分)

たけし(2年生)は学童クラブに登録している児童である。たけしは遊び利用で来館した。いずれも2年生のりょうた、だいち、のぶおと、1年生のとしおとプレイルームにおいてドッジボールに興じていた。その間ドッジボールの脇ではかずや(2年生)がたけしの私物であるポータブルゲームで遊んでいた。その後(15時30分)、児童館のプログラムである和太鼓サークルが同室で練習を始めたため、プレイルームが使用できなくなり、ドッジボールもポータブルゲームも終了しなければならなくなった。その後、としおとのぶおは学童クラブ室へ移動し、二人でじゃれあいながら遊んでいた。たけしとりょうた、かずや、だいちは集会室へ移動し、たけしとだいちがたけしの私物であるカードゲームに興じた。こうへい(2年生)が仲間に加わり、たけしの私物であるポータブルゲームで遊んでいた。その両脇から、かずやとだいちがゲームを眺め、会話をしていた。その後、16時00分までカードゲーム、ポータブルゲームでの遊びは継続し、たけし以外の児童が学童クラブのおやつの時間で学童クラブ室に行ってしまうことによって遊びが終了した。たけしはその後5分ほど一人ポータブルゲームで遊んでいたが、仲間がおやつを食べに行ってしまったため帰ってしまった。

【事例 3】おやつの時間によって遊びが制限される例(10月16日(金)14時10分)

たろう(1年生)が来館していた。たろうは児童館に一人でよく来館する。その後、たろうは学童クラブに登録している児童である、ただお(1年生)、のりお(1年生)、としお(1年生)、よしき(1年生)たちとプレイルームやグラウンドでボールを使って遊んでいた。その後(15時30分)、砂場にてたろうとただおが二人であそんでいた。そこによしきが加わる。16:00にはただお、よしきが学童クラブのプログラムである、おやつの時間で学童クラブ室に行ってしまう。その後たろうは一人砂場で遊び、16:10に退館し、おやつ終了後の16:40に再び来館した。その後、17:30の児童館利用終了時間まで、ただおや学童クラブに登録していない小学校4年生や6年生と遊び、退館した。

【事例 4】学童クラブの登録者と非登録者が遊ぶ例(10月10日(金)11時10分)

学童クラブ室にて、ともこ、えりか、のりお(1年生)がブロックを食べ物にみたててレストランごっこをしていた。この3名は学童クラブに登録している児童であった。そこに遊び相手を探している、たろう(1年生)が通りかかった。しかし、たろうは学童クラブには登録しておらず、学童クラブ室の中には入ることができない。学童クラブ室の入り口でたろうがともこたちに話しかけた。しかし、ともこたちは、「たろうは学童の子じゃないから入れないじゃん」と、なかなか取り合ってもらえない。その後、何回かの会話のやりとりの末、学童クラブ室の隣の憩いルームまで、配達をするということになった。ともこたちは学童クラブ室でレストランごっこを継続し、たろうのところには配達の際にしか訪れなかったが、たろうを交えて遊びが継続することとなった。

以上の【事例 1】から【事例 4】より、学童クラブへの登録の有無によって利用できるスペースの違いや場所の利用区分が現れていた

こと、学童クラブのプログラムという時間的な制約によって遊び相手が立ち去ってしまうことが児童達に利用形態の違いを認識させ、学童クラブの内外意識といったものを与えている。また、【事例2】と【事例3】から、学童クラブを併設している児童館では、施設内で行われるサークル等のプログラムによって子どもたちの遊びが制限させられる場合があることがわかった。

学童クラブの育成プログラムがあることによって遊びはいったん終了するが、【事例3】のように遊び集団を分割することで、他の場所で新たな遊び集団を作り出し、さまざまな子どもとの交流の機会をつくることにもなっている。

学童クラブのプログラムによって遊びは終わりもするし、交流を促すことにもなるため、一概に良し悪しの判断はできない。ただ、プログラムがあることで、通常の遊び場にはない、多様な人間関係が創出されている可能性がある。

### 5-2.年齢による力関係

児童館では、様々な年齢の子どもたちが遊んでいる。同じ空間で一緒に遊ぶことにより、年齢による力関係が浮かび上がる。以下、年長者により無理やり遊びが終わる事例【事例5】、年長者との力関係の例【事例6】、年長者のスペース占領の事例【事例7】をみていこう。

【事例5】年長者によって無理やり遊びが終わる事例(11月21日(土)9時)

プレイルームにて、学童に登録している児童である、のりおとただお(1年生)がボールをかべにあてて遊んでいた。そこに、げんた(3年生)とこうき(4年生)がやってきた。こうきが「ドッジボールしようぜ」といい、げんたはそれに従った。こうきがのりおに「ドッジボールやるからボールかして」と言ってボールを奪い、遊びが終わってしまった。その後、のりおはドッジボールに参加しなかった。

【事例6】年長者との力関係の例(10月28日(水))

14:40に児童館を利用する6年生ら8人がグラウンドを利用しサッカーをしていた。その間、たつや(1年生)はグラウンドの端でボールを蹴っていた。のぶお(2年生)は鉄棒をやっていた。その後14:45、6年生の集団が退館する。するとのぶおと、たつやが空いたスペースでサッカーを始めた。15:30、6年生らが人数を13人に増やして再び来館し、サッカーを始めた。のぶおと、たつやは、6年生に『危ないよ。』と言われて遊びが終了した。

【事例7】年長者によるスペース占有の事例(10月31日(土)15時30分)

グラウンドにて、中学生1名がサッカーのユニフォームを着て、パイロンを並べ、サッカーの練習をしていた。その時、いつもよくサッカーをするためにグラウンドを利用してくる6年生の集団が来館するが、サッカーをするスペースが占有されている状況を見て、すぐに退館してしまう。その様子を、鉄棒をしながら見ていたりしょうこ(1年生)は、「お兄ちゃんたち(6年生の集団)はこういう人たち(中学生を)嫌いなんだよ、だって邪魔しているみたいじゃん。」との発言があった。

【事例5】、【事例6】のように年齢のちがいで力関係によって、遊びが強制的に終了させられてしまう例がみられた。また、【事例7】のように、年長者による力関係、場所の占有によって、遊びの発生が妨げられてしまうことがわかった。

### 5-3.男子の遊びでの集団規模変化

男子児童どうしでは、関わり頻度が低く、さまざまな相手と遊んでいることが読み取れた。事例を通して、男子の遊びについてみていこう。

以下、【事例8】では集団が大規模になっていく例、【事例9】では集団の人数が変動する例をみていこう。

【事例8】集団が大規模になっていく例(9月29日(火))

14:10 に、グラウンドにて四年生の男子児童が 3 人でサッカーをしていた。14:30 に、学校から帰ってきた、まもる(1 年生)とりょうた(2 年生)が、4 年生集団のサッカーに参加した。その後 14:40 に、学校から帰ってきたこうへい(2 年生)が参加し、まもるが遊びから抜けた。14:50 にはそれまでプレイルームで遊んでいた、たけし(2 年生)とその友達に参加した。はじめは三人でサッカーをしていたが、そこに他の集団が参加していくことで、最大時には集団規模 8 人の集団となった。

【事例 9】集団の人数が変動する例 (10 月 16 日 (金))

16:10 に、グラウンドにて 5 年生男子の 6 人がサッカーを始めた。16 :20 に、こうきを含む 4 年生の男子 4 人が加わり、集団は 10 人となった。その後 16:30 に、5 年生の男子 6 人と、4 年生の男子 2 人が遊びから抜け、こうきとその友達の二人でサッカーを続した。

【事例 8】と【事例 9】から、男子の人数が多い遊びでは、集団の構成員が流動的であり、集団の規模が変わりやすいことがわかった。

#### 5.4.大人の介在

児童館内での、大人の役割とはなんだろうか。集団での遊びの種類や事例から、大人の役割をみていこう。大人が介在する場面では、大人と子どもが会話する回数が一番多かった。また、ボードゲームやカードゲーム、野球といった一人ではできない遊びが多かった(表 8)。

【事例 10】遊び相手が来たら大人が消える例 (9 月 19 日(土))

13:30 に学童クラブに登録していない児童が来館し、職員を相手に職員室前でボードゲームを遊びはじめた。その後 14:00 に、学童クラブに登録していない児童が来館し、ボードゲームを興じていた 2 人のようすを見てい

た。14:10 には職員が遊びから抜けて、学童非登録児童どうしでボードゲームを始めた。遊びの中で、お互いの名前を尋ねあっており、二人は初対面だった。その後、14:40 にボードゲームは終了し、二人は「家に遊びに来るか」と話し合い、これからの遊び場の話しながら、二人はそろって退館していった。

児童館の職員は、児童館が提供するプログラムの中ではプレイリーダーとして役割をもつが、自由な遊び時間の中では遊びに積極的に介入することは少なく、児童どうしの遊びをサポートする立場にある。人数が必要な遊びや一人で遊んでいる児童の要請を受けて遊び相手となるが、他の児童が遊びに加わると、児童どうしの遊びを促すために遊びからぬけるといったケースが多かった。

大人と関わる頻度が一番高かったのりおは、大人とどのように関わっているのだろうか。次に見ていく事例は、子どもどうしのチームわけの事例【事例 11】と、大人と遊ぶことを選択する事例【事例 12】、一人遊びを選択する事例【事例 13】、模倣行動と思われる遊びの事例【事例 14】である。

【事例 11】チームわけにおける事例(9 月 28 日 (月) 15 時 10 分)

のりお(1 年生)はボールをうまく投げることができず、プレイルームでドッジボールをする際に、3 人から 4 人程度の小さな集団には参加していた。15:20 には集団が大きくなるにつれて、のりおにボールが回ってこなくなり、遊びの輪から離れてしまう。チームわけを児童どうしでやっても、後に残ってしまうことがある。また、のりおはチームわけをしている最中や、遊びの最中でも、大人が近くにいるとよく「一緒に遊ぼう」と声をかけ、子どもの遊び集団から抜けようとした。

【事例 12】大人と遊ぶことを選択する事例(9 月 29 日(火))

表8 大人が介在する遊びと遊び集団の構成人数\*

大人が介在するとき	1人	2人	3人	4人	5人	6人
サッカー				1	1	1
野球		6	1	1		
ボードゲーム		1			1	
カード		2		2		
フリスビー		1	1	1		
会話		3	4	2		
ドッジボール				1		
バスケットボール			2			
勉強			1			
砂遊び			1			
カロム		1				
ドミノ		2				
キャッチボール		1				
工作		2				
絵を描く		1				

\*大人の人数を含む

(2009年10月に行った調査より作成)

15:00 にプレイルームで学童の1年生の男子児童3人が1年生男子を交えて、カタキに興じていた。のりおとまもる(ともに1年生)がバスケットボールにふけていた。15:05にはのりおが「一緒にあそぼう」と私(調査者)に声をかけてきた。のりおが抜けたことにより、まもるはカタキをしているグループに入れてもらい、ドッジボールをはじめた。のりおと私は、キャッチボールをはじめた。私が「皆で遊ばなくていいの」と尋ねると、「いいの、早く投げて」と答えた。その後、のりおが「こうやってなげて」とオーバースローの投球フォームを指示し、キャッチボールを行った。キャッチボールは断続的に繰り返されて、のりおはボールが返球されるまでの時間、同じ部屋で行われている、ドッジボールの様子を眺めていた。

【事例13】一人遊びを選択する事例(10月9日(金))

14:30 に、のりおが職員を誘い、二人でグラウンドにおいてバッティングをはじめた。その後、30分ほど職員にボールを投げてもらい、のりおが打つ遊びを繰り返していた。そ

の後まもる(1年生)が仲間に入り、打者を交代した。15:10になると小学校から帰ってきたこうへい(2年生)、のぶお(2年生)が野球の仲間に加わるが、のりおは自ら遊びをやめて、1人砂場で遊びはじめた。

【事例14】模倣行動と思われる遊びの事例(11月14日(土))

11:30 に、プレイルームにてのりおに「一緒に遊ぼう」と声をかけられた。キャッチボールをはじめたが、のりおの指示により、「あてるやつ」を始めた。「あてるやつ」とは相手を追いかけてボールを相手に当てることで役割が交代する遊びである。次に「もらってごらん」を再びのりおの指示によってやることになった。「もらってごらん」とはバスケットゴールを使い、相手とボールをとりあいシュートを撃つ遊びである。

次に「こうやってなげて」をのりおの指示によってやることとなった。「こうやってなげて」とは、野球のオーバースローのフォームでキャッチボールをすることである。のりおの指示によって遊びが展開する。「あてるやつ」、「こうやってなげて」という指示は以前

から見られたが、「もらってごらん」という指示は10月26日のバスケットボール以降にみられたものであり、この遊びは模倣行動と位置づけられるのではないだろうか。

このように、のりおは遊び集団の人数が増加するのにもなって、集団から抜け出し、職員など大人の遊び相手と遊ぶことや、一人での遊びをすることが多かった。のりおについて職員の方にお話を伺ったところ、職員の経験上、大人と遊びたがる子どもには二つのタイプがあるという。一つ目のタイプは自分が仲間に入れてもらうため、遊びを模倣し一人で練習するものである。第二のタイプは、大人と遊ぶことに慣れており、「大人を相手にすることで児童自身が指示を出して思うように遊ぶことができるからだ」というものである。りおは、夕方に家の前で父親と遊んでいることが多く、後者ではないだろうか。しかしもう少し大きくなると、そのような趣向があるかは判断できないという意見が得られた。

### 5.5.児童館利用児童の滞在のしかた

この調査より、児童館での滞在の仕方には、児童館に来館してから退館するまでずっと児童館にいる「継続滞在型」と、一度来館してから出入りを繰り返す「出入り滞在型」にわけることができる。

児童館に来る目的として、児童館で遊ぶ以外に、特定の友達を探しにくる、遊び相手をさがしにくるという事例がみられた。

他の遊び場が、事前に遊び相手の確保や遊び道具の準備が必要な場所であるのに対して、児童館は常に遊び相手や遊び道具が用意されているのである。児童は、児童館を遊ぶ場としてだけでなく、遊び仲間の調達にも児童館を利用していることがわかる。仲間を調達し、児童館でできない遊びを他の遊び場で楽しんだり、他の遊び場で遊び、通りがかりに児童館に立ち寄りたりしている様子が見られた。

このように学童に登録していない児童にとって、児童館は遊び場として利用されるだけでなく、遊び仲間の調達の場としても利用されている。

## 6.考察

家族形態の変化や、地域社会の崩壊によって子どもを取り巻く環境は変化しつづけている。地域の子どもの集団が自然に生まれる時代ではなくなっている。しかし、学童クラブでは今でも異年齢の交流が行われている。児童館での自由な遊び時間における集団構成は、男女が分離している傾向が強く、全体の88%を占めていた。男子児童のみでの遊び集団の構成人数は3人がもっとも多く、最大で11人であった。自然発生的な大きな集団は、サッカーやドッジボールなどの遊びの時によくみられた。男子の遊びには運動を伴う遊びが多くみられ、【事例8】や【事例9】からもわかるように、運動をしている際に、遊び集団の構成員は流動的であった。これらのことを考えると男子児童の遊びについては、3人程度のメンバーが流動しながら遊んでおり、運動をともなった遊びをすることで、10人を超えるような大きな集団が形成されていた。

女子の集団は2人から5人程度の人数で形成されていた。遊びの内容は、会話やままごと、砂遊びなど運動をとまなわないものが多い。遊びのなかにも、女の子同士のおしゃべりが多くみられた。

住田(1995)によると、集団の種類には交友集団と活動集団がある。活動集団とは運動などの活動的な遊びをするための集団であり、仲間どうしのつながりよりも、遊びの内容でのつながりが強いため、その人員構成は流動的である。交友集団は特定の遊び相手との交友を目的とするものである。そのため仲間同士のつながりが強い。

男子の遊びには、身体を動かす運動が多くみられたことや、1年生の男子児童が性別や学年にかかわらず、さまざまな相手と遊んでいることや、男子児童の遊び集団の大きさが変動することから、男子児童は活動集団を形成する傾向にある。それに対して、女子児童は砂場やごっこ遊びなどの運動をとまなわない遊びが多いことや、1年生の女子児童では

集団のまとまりが顕著なことを考慮すると、交友集団を形成する傾向にある。

学童に登録している児童と学童に登録していない児童のあいだには、【事例1】から【事例4】で述べたように、児童館という施設の利用形態に差がある。利用形態とそのメンバーシップの差によって遊びが終了し、分断されることもあれば、逆に、新たな遊びの機会を得ることもなり得る。学童クラブに登録している児童と学童クラブに登録していない児童が同じ場所で遊ぶことによって、学童クラブ内の子どもとの関係を強化することにつながっている。

現代では両親が不在であることが多く、密接な地域コミュニティがなく、自発的な集団が生まれにくい。そこで地域の遊びの拠点としての児童館の存在があるのではないだろうか。児童館に学童クラブを併設することで、児童館は単なる遊び場でなく、遊び相手をストックする場でもあると考えられる。そのため、学童クラブに登録する友人を求めて、非登録の児童が1人で来館する事例が頻繁にみられた。また、学童では異年齢集団の縦割りの班分けでの生活がごく一般的であり、学童クラブに登録している児童は異年齢集団での行動に慣れており、とくに男子において異年齢集団で遊ぶことが多い。このことが学童クラブに登録している児童以外にも交えた異年齢集団の遊びを促すことにもなっているようだ。大人の存在は子どもたちの遊びを監督するだけでなく、子どもどうしのつながりを生み出していた。

姿を消したと言われていた子どもたちの異年齢集団が、学童保育の場で存在していること、児童館と学童保育が併設されていることによって、児童館の利用者と学童登録児童のあいだで交流が生まれ、児童館内の社会関係の強化につながっていることが明らかになった。児童館利用者としての立場からみれば、普段の生活では経験しづらい、異年齢集団での遊びに触れることもできるのである。

学童クラブとして、子どもの放課後における生活の場を提供するとともに、地域の遊び場として地域の子も達を取り込んでいくこ

とは、未来の地域社会を担っていく子どもたちの人間関係の形成に好ましい影響をもたらす可能性があるだろう。ただし、高学年にむかうにしたがって遊び集団がどのように変質していくのかについては今後の研究課題である。

## 謝辞

卒業論文を執筆するにあたり、大山修一先生ならびに、渡邊眞紀子先生に論文の構想から執筆にいたるまで幅広くご指導いただきました。調布市の児童館の職員、児童の皆様、調査を快諾していただき、子どもたちの生活に触れることは自分にとってとてもよい経験となりました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

(首都大学東京 都市環境学部 地理環境コース 2009年度修了; 首都大学東京 都市環境学部 建築都市コース在学中)

## 参考文献

- 亀井伸孝・島田将喜・明和政子・川村協 2009. 『遊びの人類学』 昭和堂.
- 梶木典子・瀬渡章子・田中智子 2001. プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての児童館の利用実態——神戸市における来館児童を対象とした調査事例、日本家政学会誌 52(6):545-558.
- ギル・ヴァレンティン著、久保健太訳、汐見稔幸 2009. 『子どもの遊び・自立と公共空間』 明石書籍.
- 下浦忠治 2002. 『学童保育——子どもたちの「生活の場」』 岩波書店.
- 下浦忠治 2007. 『放課後の居場所を考える』 岩波書店.
- 住田正樹 1995. 『子どもの仲間集団の研究』 九州大学出版.
- 仙田満・岡英紀 1993. 子どもの遊び環境の構造的変化に関する研究—横浜・山形にお

- ける経年比較調査による、都市計画学論文集 28:763-768.
- 寺本潔・大西宏治 2004. 『子どもの初航海』古今書院.
- 水月昭道 2007. 異なる通学環境に対する質的評価の違いについて 立命館大学人間科学研究 13.
- 全国学童保育連絡協議会 2009. 『各個学童保育情報 2009-2010』全国学童連絡協議会. 総務省統計局. 平成 13 年 2 月労働力調査特別調査.
- <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000000190003>(最終閲覧日:2010 年 1 月 8 日)